

折に触れ 四字熟語

NO. 86 『生死骨肉』 せいし こつにく

< 意味 > 窮地にあるときに助けてくれた人の大恩のこと。また、恵みや施しの非常に深いこと。落ち目の人を救い上げること。死んだ者を生き返らせ、しかばねの白骨に肉をつける意から。

< 出典 > 春秋左氏伝「襄公」二十二年の一節

『對曰、昔、觀起有寵於子南。子南得罪、觀起車裂。何故不懼。自御而歸、不能當道。至謂八人者曰、吾見申叔。夫子所謂生死而肉骨也。知我者、如夫子則可。不然請止。辭八人者、而後王安之。』

読み下し：『對へて曰く、昔、觀起、子南に寵有り。子南は罪を得、觀起は車裂せられたり。何の故に懼れざらん、と。自ら御して歸り、道に當たる能はず。至りて八人の者に謂ひて曰く、吾は申叔を見る。夫子は所謂死を生かして骨に肉するなり。我を知る者、夫子の如きは則ち可なり。然らずんば請ふ止めん、と。八人の者を辭して、而る後に王之に安んぜり。』

通 釈：（申叔は）「前に觀起が子南の寵愛を受けました。子南が処刑されますと、觀起もまきぞえを受けて車ぎきにされたではありませんか。どうして恐れないわけにいきましょう」と答えた。蘧子は自分で車を御して帰ったが、（不安におののいて手綱もとれず）道の真中を進むことができなかつた。ようやくにして家に帰ってから八人の寵臣に向かつて「申叔に会ったが、あの人は世間でいう、死んだ者を生かして骨に肉をつける、というものだ。わたしを理解してくれる人というなら、あの人のようなら結構だ。そうでないなら絶交しよう」といった。かくて八人の者と絶交したので、楚王も蘧子に心を許すようになった。

一 言： 死、生シリーズその4

長いので前後の文を割愛していますが、通釈の最初の「 」の中は、楚王の令尹（中国周代、楚の官名）である蘧子が申叔という人物に意見を聞こうとするのですが、それに対して申叔が過去の事例をあげて言った言葉です。蘧子はそれによって気づかされ、申叔を評して「死んだ者を生かして骨に肉をつける、というものだ」と言いました。

参照文献： 新釈漢文大系「春秋左氏伝 三」 三省堂「四字熟語辞典」